

好きを追求したら...

お助けシート

イノベティブな仕事をしている多方面の
トップランナーからのメッセージ。“未来
の仕事”や自分の将来について考える
ヒントを、ここから探してみませんか？

将来の安心ルートより「今の楽しい」を。

子どもの頃から「これ」と思い定めて行動した…そんなわかりやすいストーリーは、残念ながら私にはありません。偶然の出会いや出来事の積み重ねが、今に繋がっていますから。東大の学生にも「真面目にキャリアパスを考えても仕方がない」という話をするんです。10年、20年後の日本を予想できない中で、「役に立つかどうか」で選ぶより、「好き」で選んだほうがいいよね、と。その結果、振り返るとそれなりに筋が通った一本の道になっているものです。「そんな役に立つの？」「おかしい、つまらん」と言われるアイデアこそオリジナル。自分の好きを追求し続けた結果、それが当たればオンリーワンになれるし、うまくいかなくても何度でもやり直せるので大丈夫です。

知りたい気持ちだけで生きてます。

高校生の時から地理や人々の暮らしに興味がありました。世界の暮らしを知るには、生活の中心にある「台所」だと思ったんです。ただ見るだけより関わったほうが知れることが多いから、「料理も一緒にさせてくれませんか？」って。この行動を、調査研究的だと思われるかもしれませんが、もっと探索的。問いを立てるまで待てないほど好奇心に突き動かされ、むしろ現地で問いをもらって帰ってきます。そもそも台所探索の原点は、好奇心。会社員時代に社内ブログで世界の台所のことを書いていたら、なんだかコロコロと転がって、講演や学校授業、本の執筆の依頼をいただくようになった。ただ好きでやっていたことを、仕事に押し上げてくれる人がいた。社会に価値を選ぶことを「仕事」とするのなら、その価値は、自分以外の誰かが見出してくれるのかもしれないね。

「フロンティア思考」を持とう！

まだ経験したことのない未知のことに出会ったとき、好奇心を持って「面白そう！」と積極的に挑戦して学びに変える考え方。僕はこれを「フロンティア思考」と呼んで実践しつつ、同名の本にまとめています。こうした心構えのおかげで、もともとは音楽家、あるいは情報系研究者だった僕は、それまで全く未知だった「食」「味」「健康」といった世界に関わって貢献することができました。今もそういう考え方をしているので、おそらく10年後の僕は、さらに全く違う分野に携わっていると思います。みなさんも、さながらゲームの冒険者のように、常に知らない世界を歓迎して挑戦してみましょう！

東京大学 国際高等研究所 ニューロインテリジェンス
国際研究機構(WPI-IRCN)教授・主任研究者 /
東京大学大学院 医学系研究科
分子細胞生物学専攻細胞生物学・解剖学講座 教授

岡田 康志 さん

生きたままの細胞を直接観察することを可能にした超解像顕微鏡など、最先端のイメージング技術を開発・駆使し、「生命とはなにか」、「生物はなぜ動くのか」という根本的な問いに迫る。



最先端の顕微鏡を使って研究

世界の台所探検家

岡根谷 実里 さん

世界180以上もの家庭の台所を訪れ、一緒に調理した家庭料理から見えてくる現地の暮らしや社会文化背景を発信。その探究心から、2024年にはオランダの大学へ入学、文化人類学を学ぶ。



パプアニューギニアにて。ココナッツを削るところから夕食の支度がはじまる

明治大学 総合数理学部
先端メディアサイエンス学科
教授・学科長 /
イグ・ノーベル賞(栄養学)受賞者

宮下 芳明 さん

減塩食を電気の力で濃い味に感じさせるスプーン「エレキソルト」や、食品の味を瞬時に熟成させたり新鮮に戻したりする「味のタイムマシン」を発明。



味を記録・再生したり、味の感じ方を変える「味覚メディア」の授業

※50音順

審査員長
から
ひとこと

AI時代にふさわしい特異な発想、
AIが処理できる範囲を超えたアイデアを期待しています！

審査員長
河川 洋一郎

